

Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2015

Report

2015

卷頭言

「文明研究所所長としての二年間を振り返って」



齊澤 宣賢
文明研究所所長
総合教育センター教授

文明研究所の所長に就任してからの二年間（2014～2015年度）を振り返って、私の思いを述べたいと思う。最も思い出深いのは、昨年2015年11月13日から14日の二日間、文明研究所がデンマークのコペンハーゲンにある東海大学ヨーロッパ学術センターで「日欧間の文明対話」と題する国際シンポジウムを開催したことである。詳細は本所報に掲載されている本学 大学院文学研究科文明研究専攻の大学院生 元治千明氏の報告に述べられているが、文明研究所としてこうした国際シンポジウムを開催できたことは、大きな成果であると考えている。それは、日本の研究者がヨーロッパに行きそこで研究成果を英語で発表したということだけでなく、ヨーロッパ（今回はドイツ、オーストリア、イタリア、デンマーク）からも研究者に発表者として参加していただき、互いに内容のある議論を行うことができたという点である。さらに、今回の発表者には大学院生が二人含まれており、院生にも英語による発表行ってもらった。日本国内の学会ではなく、外国で行われたシンポジウムに参加し、そこで英語の発表を行うことは院生にとって大変なプレシャーがあったことと思う。しかし、院生達は指導教員である平野葉一教授（平野教授は文明研究所の所員でもある）の指導の下、みごとに発表を行った。この発表については私だけでなく、外国人研究者からも高い評価を得ており、院生達にとってこれから的研究活動を行う上で大きな自信になったのではないかと考えている。今後も院生を含むこうしたシンポジウムをデンマークで定期的に行なうことは、ヨーロッパ学術センターからの情報発信という点からも大いに意義あることと考えている。本学の創立者松前重義博士がデンマークにヨーロッパ学術センターを開設したのは、1970年（昭和45）のことである。創立者は1934年デンマークを訪ね国民高等学校を訪問し、その体験が今日の東海大学の母体となった望星学塾につながるのであるが、松前博士は30年来東海大学の思想の源流の地であるデンマークに「何か教育的のもの」をやりたいという希望を抱いていた。（『東海大学50年史』「ヨーロッパ学術センター」636頁）その思いが1970年に実現したのである。1977年には「現代の日本」をテーマに第一回日本学シンポジウムが、1979年には第一回医学シンポジウム開催された。そして今まで、創立者の思いを受け継い

でヨーロッパ学術センターでは様々なシンポジウムが行われている。今後もヨーロッパ学術センターを会場とし、こうした活動を継続していくことは重要であり、文明研究所がこうした活動の一端を担うことができればと考えている。私が学術センターを訪れたのは今回で二回めで、大学院生だった1977年以来のことである。シーボルトの資料調査のためオランダを訪れる途中、当時学術センターの所長だった鈴木八司教授にお世話をいただき宿泊させていただいたのである。本当に久しぶりに学術センターを訪れ、今回こうした国際シンポジウムを行なったことで、改めて本学創立者の思いについて考えるよい機会となつたと考えている。

もう一つは、今年2016年1月に亡くなられた東海大学の元学長松前紀男先生の思い出に関する事である。松前紀男先生は学長と共に、文明研究所所長を兼任されていた時期（1993～1996年度）があり、私はその下で現代文明論の副主任を務めていた。ちょうど93年から実施される新カリキュラム策定の時で、前年から文明研究所所長事務取扱に就任されていた松前先生指導の下、次長の望月享子教授を現場責任者として皆で新カリキュラム作成に当たつたのである。また、現在私は「東海大学75年史」の編集副委員長（委員長は橋本敏明常務理事・体育学部教授）として年史の編集にも当っているが、松前先生には2014年の10月と11月の二度にわたり、75年史編集委員会の席上で北海道東海大学学長（1981～1991年10月）と東海大学学長（1991年11月～1997年度）の両学長時代のお話を伺う機会を得た。そのお話の内容から感じたことは、先生の東海大学に対する熱い思いであり、編集委員一同こうした先生の思いを共有できたところで、その事を年史に反映しなければならないと考えている。

私にとってこの二年間は貴重な体験ができた時期であったと思う。一つは、シンポジウムを通じて創立者松前重義博士の思いをデンマークで感じることができたことであり、もう一つは松前紀男先生のお話を伺つたことで、こうした思いを次の世代に伝えていくことの大切さを認識することができたことである。所長としての二年間、多くの人達に支えられなんとか任を全うできたことに感謝とお礼を申し上げます。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創立者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの中の文明のあり方について総合的に研究する機関です。当研究所は、これまで「21世紀文明の創出」という研究テーマのもと、3年を1期とする研究プロジェクトを策定して研究を推進してきました。第1期「現代文明の展開と社会文化的多様性」（2001年度—2004年度）においては現代文明の多様性を指摘し、第2期「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」（2005年度—2007年度）においては地域研究と国際的な研究連携を進めながら、グローバリゼーションの持つ意味を人間の生活の変化という観点から捉え研究を行いました。第3期「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」（2008年度—2010年度）においては対話と共生の観点から21世紀文明のあり方に対する提言を目指し、第4期「創出すべき21世紀文明」（2011年度—2013年度）においては第3期から打ち出した「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」をさらに進めてきました。

2014年度から当研究所では、本学の第Ⅱ期の中期目標（2014年度—2018年度）を受けて「文明とグローバリゼーション」というテーマを掲げました。そして、研究分野（国際レベルでの研究拠点の確立）、社会連携（地（知）の拠点の確立）、国際連携（グローバルユニバーシティの構築）のミッションを担当します。この中の研究分野では、コアプロジェクトとして「アイデンティティの多様性と共生」、「グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築」、「震災復興と文明」、「文明遺産をめぐる課題」を推進すると共に、2015年度に新たに立ち上げた「超領域（Trans Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」の5つのプロジェクトを実施していきます。

文系研究所の沿革

- 1959年 文明研究所設立（初代所長 原田敏明）
- 1964年 基礎社会科学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1969年 芸術研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1982年 法学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1988年 基礎社会科学研究所、法学研究所を統合して社会科学研究所設立（初代所長 白鳥 令）
- 2001年 文明研究所、社会科学研究所、芸術研究所を統合して新文明研究所設立（初代所長 松本亮三）

2015年度の研究プロジェクト

「アイデンティティの多様性と共生（第2期） (コア・プロジェクト1)

小貫大輔・沓澤宣賢・平野葉一・松本佳穂子

文明にとっての多様性とは何を意味するのか、アイデンティティというキーワードを使って研究しようとしています。これまで「言語的多様性」と「ジエンダーを巡る多様性」および「異文化間の出会い」の3つのテーマについての研究をしてきました。「言語的多様性」を巡っては、多様性に前向きに取り組むヨーロッパの打ち出す指標を基に異文化間能力の

構成要素について研究しています。「ジエンダー」については、ダイナミックに変化するブラジル社会にフォーカスをあて、多様なジエンダーのあり方への寛容さが拡大していく様を追っています。「異文化間の出会い」に関しては、歴史研究の視点からシーボルトの人生と彼の異文化理解の様が示唆するものについて検討しています。また、それらの研究に触発され、異文化を生きる人たちの身体性の変容を言語相対論再評価の視点から検討する研究も始めました。

グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築（第2期）」（コア・プロジェクト2）

大江一平・富士原雅弘・鷹取勇希

本研究は現代文明をグローバリゼーションという視点からとらえ直すことを主たる目的としています。現代文明をグローバリゼーションの視点から再認識するということは、グローバリゼーションが現代文明に対しどのような歴史観をもつよう迫っているのかについて考察することといえます。そこで、本研究はグローバリゼーションが社会を変容させる推進力となりうる歴史観とは何かを検討する一方で、グローバリゼーションに対する拮抗力となりうる歴史観についても検討してきました。そして、この推進力と拮抗力を一体的にとらえることにより、グローバリゼーションが社会を変容させる経路の多様性を考察しました。本研究の学術的意義は、法学、政治、経済、環境、教育、言語といった多様な分野の研究員が当該プロジェクトに関わることにより、多様な歴史観に基づいて、分野横断的な視点からグローバリゼーションを考察する点にあるといえます。また、本研究の現時点における成果は、グローバリゼーションという現代的課題に対し、「調和のとれた文明社会の構築」という東海大学の建学の精神に立ち返り、現代文明論を必修科目として開講する大学としての独自の視点を発信できたことがあります。

「震災復興と文明（第2期）」（コアプロジェクト3）

田中彰吾・沓澤宣賢・馬場弘臣・杉山太宏

このプロジェクトは、東日本大震災からの復興過程が問いかけているさまざまな文明論的課題を明らかにし、望ましい復興政策について検討しようとするものです。言うまでもなく、東日本大震災はきわめて大規模な自然災害であり、被災地域の復旧・復興という具体的な課題を残しただけでなく、原子力発電の問題を含め、私たちに現代文明のあり方を反省させる契機となりました。文明研究所では、2011年以来、震災復興と文明に関する研究プロジェクトを継続してきました。過去のプロジェクトでは、大津波災害への多重防御策、

再生可能エネルギーの活用方法、水産業と漁村の復興支援策等が検討されました。2014年度からは、参加メンバーが一新されたことを受け、人間学的観点、歴史学的観点、工学的観点から、新たな課題設定のもとで震災復興と文明についての検討を続けています。より具体的には、それぞれ、(1)「復興におけるランドスケープの形成」、(2)「江戸期の大地震と東日本大震災の史的比較」、(3)「防災・減災のためのハード対策とソフト対策」という個別の特色ある課題を設定して研究を進めています。本プロジェクトの主な成果として、2014年度は、(2)について馬場弘臣氏（プロジェクト分担者）が『文明』誌上で論文を刊行しました。今年度は、田中彰吾（プロジェクトリーダー）が(1)について、同誌で論文を刊行する予定です。いずれも、文明研究所ならではの、学際的な討議と研究にもとづく特色ある論文になっています。

「文明遺産をめぐる課題」（コア・プロジェクト4）

横山玲子・山花京子・吉田晃章

本プロジェクトでは、1) 東海大学所蔵の考古学遺物（古代エジプト及び古代アンデス）を利用した企画展示及び遺物整理、2) 文明理論研究の2つの課題である。2015年度は主に、1) のうち、古代アンデスの考古学遺物については、横山玲子（プロジェクトリーダー）および吉田晃章氏（プロジェクト分担者）を中心にデータベース化を開始した。本データベース化の作業は、今後も継続して行う。また、古代エジプトの遺物については、山花京子氏（プロジェクト分担者）を中心に学生とともに、整理作業が継続して行われている。一方、2) の文明理論研究においては、横山が主に比較文明学会を中心に、現代文明における本質的な問題がどこにあるのかという理論的な研究活動を継続して行っている。2015年度は、6月に開催された比較文明学会「災害と文明シンポジウム2 火山列島の災害と文化と文明」にパネリストとして参加し、アステカ時代の「火」の神と火山にまつわる神話をもとに、アステカの人びとが自然災害についてどのように捉えていたかを

報告した。また、キチュー・マヤ族の創世神話『ポポル・ヴフ』を題材に、人間社会における「地位」と「役割」がどのように神話の中で構造化され、表現されているのかを検討し、現代社会における個々人の存在論的位置づけに関する問題を提起する論文を執筆し、『文明』第20号（2016年3月）に投稿した。その他、2月には韓国漢陽大学（主催）及び比較文明学会（共催）が開催した国際学術セミナー「日本文化研究の拡充と連携」においても、現代日本社会における「地位」と「役割」のあり方に関する研究報告を行い、3月には比較文明学会関西支部・九州支部合同研究会「こよみ以前—文明比較の可能性をめぐって」において、マヤ文明における時間観念について報告を行い、ヨーロッパや中南米など、さまざまな地域の時間観念および現代の天文学の観点も含め、広く時間論に関する議論を行った。

「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」（コア・プロジェクト5）

平野葉一・沓澤宣賢・田中彰吾・吉田欣吾
・中澤達哉・服部泰・中村朋子・鷹取勇希
・日高彩乃・元治千明

本プロジェクトは、文明研究を学際的研究として位置付け、新たな人文学（超領域人文学）研究の構築を目指したものであった。2015年は、その基礎研究として、東海大学文学研究科文明研究専攻の大学院生、修了生も含めて、研究会を実施した。具体的には、過去の『文明』に掲載された論文からとくに超領域人文学研究の性格を有するものを選んで検討するとともに、アメリカを中心としたAnthropoceneに関わる研究や国内の学際研究の動向について調査した。また、研究活動の一環として、2015年11月13日・14日にヨーロッパ学術センター（デンマーク）において「日欧間の文明対話」の国際シンポジウムを開催した。東海大学からはコア・プロジェクトメンバーをはじめ

とする8名が参加したが、デンマークやドイツなどを含め全体で40名程度の参加者を集め、活発な議論が展開された。この国際シンポジウムは、本プロジェクトは将来的にはEUとの共同研究を構想しているが、この国際シンポジウムは次年度に向けた一つの大きなステップとなった。

『文明』第20号（2016年3月発刊） 内容のご紹介

巻頭言

- ・文明研究に求められるもの (平野葉一)

国際シンポジウム

- ・「Civilization Dialogue between Europe and Japan」（欧日間の文明対話）
- ・Special Issue: Civilization Dialogue between Europe and Japan (平野葉一・沓澤宣賢・田中彰吾)
- ・A note on the possibility of "Civilization Dialogue" –from a Trans-Disciplinary Humanities perspective— (平野葉一)
- ・The Takenouchi Mission and Western Culture : The Introduction of the Telegraph (沓澤宣賢)
- ・European perceptions of Japan (ピーター・パンツラー)
- ・Legitimacy of English Domination and its Relationship with Linguistic and Cultural Diversity (鷹取勇希)
- ・The Beauty of Harmony : The Case of Albrecht Durer's Theory of Human Proportion (中村朋子)
- ・Reconsidering the Self in Japanese Culture from an Embodied Perspective (田中彰吾)
- ・Some ideas on civilization from the cultural psychology's viewpoint (ルカ・タテオ)

講演会

- ・セクシャリティとシティズンシップ (ダレン・ラングドリッチ)
- ・日本におけるブラジル人の教育と未来 (小貫大輔) (リリアン・テルミ・ハタノ)

論文

- ・地位と役割：『ポポル・ヴフ』に描かれたキチュー・マヤの社会 (横山玲子)
- ・復興のランドスケープ－東日本大震災後の防潮堤建設を再考する (田中彰吾)

研究ノート

- ・文明研究に関する超領域人文学からの一考察 (渡辺青・平野葉一)
- ・国連PKOへの象徴的貢献に関する考察 計量分析による要因の分析 (田辺亮)
- ・フィラデルフィア万博の機械館で展示されたアメリカのイメージ (福田州平)

国際シンポジウム「日欧間の文明対話」

2015年11月13日、14日に東海大学ヨーロッパ学術センター（デンマーク、コペンハーゲン）にて、国際シンポジウム「日欧文明対話」（Civilization Dialogue between Europe and Japan）が文明研究所およびヨーロッパ学術センターの共催で開催された。これは21世紀を見据えた文明研究の一環として、日本とヨーロッパが文明の諸問題に対して複合的視野から意見交換すること目的とし、同時に文明研究所としてコアプロジェクトである超領域人文学研究の推進およびEUの“ERASUMS+”の一環であるJean-Monnet Moduleへの将来的な参加の可能性をも視野に入れたシンポジウムであった。また、本シンポジウムに付随して、文明の諸問題に関する一般研究報告および「身体性に関する東西対話」のWorkshopも開催された。東海大学からの研究者、大学院生の他、デンマークの研究者、教育者を含め、両日とも40名を超える参加があった。

一日目のシンポジウムの冒頭に、デンマーク教育庁のPeter Grønnegård氏から、ERASMUS+プログラムに対するデンマークの基本姿勢と現状について報告があった。とくに日本における大学院生育成との連携の可能性についても言及があった。

シンポジウムでは3名の研究者の基調報告を基に活発な議論が展開された。先ず、本学文学部の平野葉一教授が “A note on the possibility of a ‘Civilization Dialogue’: from a Trans-Disciplinary Humanities perspective”と題し、グローバリ化のなかでの文化多様性の重要性について、科学認知論および文明論的視点から報告を行った。次いで、本学文明研究所所長の沓澤宣賢教授から、“The Takenouchi Mission and Western Culture:



The introduction of the Telegraph”と題し、幕末期に幕府の命によって派遣された竹内遣欧使節団による西欧技術—とくに電信技術—の導入について報告がなされた。当時の知識人たちは東洋思想の優位性を信じていたが、実際には西欧技術の先進性は想像を超えていたという点が印象深かった。最後に Bonn 大学の Peter Pantzer 教授が “European Perception of Japan” と題して報告を行った。ここでは、16世紀以降の日本に対する西洋の認識の変化について、とくに中国との比較もふまえて報告がなされた。とくに19世紀後半の写真家Michael Moser の活動に関する紹介があった。これらの問題は、西欧と日本それぞれの相互認識や影響に関わる問題で、「日欧文明対話」シンポジウムのスタートにふさわしい内容であると感じられた。

二日目の午前中は、Aalborg大学の Luca Tateo 教授によるKeynote Lectureから始まった。“Some ideas on civilization from the cultural psychology’s viewpoint”と題した講演で、昨今注目を集めている文化心理学という視点から、人間の認識についての問題を含めて文明を考察する事例が提示された。

その後のPaper Sessionでは、5名の研究報告がなされた。先ず、Austrian Academy of Sciencesの研究員である宮田奈々氏が、“European views on Japan in the 17th century”と題し、17世紀の E. FrancisciおよびE. W. Happelなる2人のヨーロッパ人による豊臣秀吉を中心とする日本観について研究報告を行った。次いで、東海大学観光学部の服部泰講師が“An essay on the tourist gaze”、外国语教育センターの鷹取勇希講師が“Legitimacy of English domination and its relationship with linguistic and cultural diversity”と題した報告を行い、また、東海大学文学研究科文明研究専攻の2名の大学院生が、“On Goethe’s criticism to Newton’s Color theory”（日高）、“The influence of Nihon-Shikki(Japanese lacquer ware) imported to Europe ”（元治）と題する研究報告を行った。

二日目の午後は、総合教育センターの田中彰吾教授を中心に、3名の報告者による「身体を通じての東西対話」（East-West Dialogue through the Body）をテーマとしたWorkshopが開催された。まず、田中教授が、本Workshopの目的も含めて “Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective”と題する報告を行った。ここでは、デカルトの心身二元論以降の心理学や認

知科学といった認識論的な捉え方はあるにしても、人間の精神と身体性の関わりをふまえ、とくに身体を通した自己理解について東西比較も含めて検討がなされた。続いて、Verona大学のDenis Francesconi氏が“Embodiment in education: The case of meditative practices in Western society”という題で瞑想の意味について、本学総合教育センターの中村朋子講師が“The beauty of harmony: the case of Albrecht Dürer’s theory of human proportion”と題しルネサンス期ヨーロッパの人体均衡論について報告を行った。人間の身体性をめぐる問題は、社会性や文化性に依存するので、西欧と日本の比較という以上にさまざまな視点からのアプローチが重要であると感じた。

今回は初めての試みのシンポジウムであったが、文明研究の一環として有意義な二日間であった。今後の継続が大いに期待されると感じられた。

(元治千明・東海大学大学院文学研究科、
文明研究専攻博士課程前期1年)

講演会

「大学と地域連携—これからの大学のサバイバル戦略—」 (2015年11月7日)

概要：

近年、文部科学省の推進する「地（知）の拠点事業（COC）」や「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」等に代表されるように、大学と地域社会の連携・人材育成がいっそう求められるようになってきました。そこで、高知県立大学の地域教育研究センターキャリア支援部会長を務めている小林直三教授を講師として招聘し、「大学と地域連携」をテーマに、持続可能な地域社会のために大学は何をすべきかについて講演していただきました。

本講演で、小林教授は、高知短期大学や高知県立大学における社会人向けの教育講座、学生ボランティアによる地域の小学生への野外活動支援、地域特産物の日曜市での販売といった地域連携・教育還元型の取り組みについて述べた上で、研究、教育、地域連携の三位一体の取り組みが大学の価値向上やサバイバル戦略に資すること、持続可能な地域社会のために市民としての教育（シティズンシップ教育）が求められること、ただし、地域連携に際しては学内外のコンセンサス、十分な準備と経験、組織トップのリーダーシップ等が必要不可欠であることを指摘しました。

また、司会兼コメンテーターの大江は、個人の自由を踏まえたシティズンシップ教育の重要性、大学の独りよがりではない、地域住民・自治体のニーズ・シーズを反映した地域連携の意義、そして、協同参画を行う場としてのフリースペースの役割についてコメントしました。

本講演に対して、フロアからは、教職員のみならず、学生からも活発な質問がなされ、東海大学の地域連携の取り組みであるTo-Collaboプログラムと、本学の新カリキュラムで導入予定のパブリックアチーブメント型教育（地域連携を重視したシティズンシップ教育）のあり方を考える上で大変示唆に富むものとなりました。

(大江一平)



講演会

「日本におけるブラジル人の教育と未来」

(2015年12月19日)

近畿大学 総合社会学部 准教授

リリアン・テルミ・ハタノ

東海大学 教養学部国際学科 教授 小貫大輔

体験創庫かけはし代表・日伯かけ橋の会副代表

藤村哲

「移民」を受け入れない建前の日本政府にとって、1990年の入管法改定で日系2世・3世に限ってほぼ無条件に受入れを決めたことは、恒常的人手不足に苦しむ製造業救済のための苦肉の策でした。それから25年、主にブラジルとペルーから多数来日した南米系外国人は「デカセギ」と呼ばれて、あたかも数年で本国に帰っていくお客様であるかのように扱われ、「移民」としての正当の権利が保障されずになりました。リーマンショックや東日本大震災の影響で減ったとはいえ、2015年段階で20数万人にのぼる南米系「移民」が日本の社会につきつける課題について、その子どもたちへの教育をめぐる問題を中心に議論しました。「日本ブラジルかけ橋の会」との共催で開いたフォーラム形式の講演会でした。

まず近畿大学のリリアン・テルミ・ハタノ氏が「在日ブラジル人の子どもたち：現状と課題—ブラジル学校の多様化と可能性」と題する発表で、日本の法制度では「学校（一条校）」と認められず公的な支援もほとんど受けられないでいる「ブラジル学校」という存在についてくわしく解説。続いて文明研究所所員の小貫大輔氏が「フリースクール支援法とブラジル学校—日本の教育を開拓する10の提案」と題して、「学校（一条校）」でない場所でおこなわれる教育を支援する法律を市民団体と超党派議連が新しく作ろうとしている現在進行形の議論について報告し、その法律が成立した場合にブラジル学校等の外国学校やオルタナティブ学校に及ぶ影響について考察。最後に、講演会共催団体の副代表である藤村哲氏が「在日ブラジル人と日本人の教育キャンプについて」と題して、長野や岐阜のブラジル学校の子どもたちと地域の日本人の子どもたちとをつなごうと続けている自然体験キャンプの活動について報告しました。

文明研究所は2007年にブラジルの連邦政府教育省からの訪問団を迎えて、日本に住むブラジル人の子どもたちの教育への支援プロジェクトに協力することを要請されて以来、全国に散らばるブラジル学校と

深い関係を持ってきました。その関係の中から、東海大学は在日ブラジル人教育者向けオンライン教員養成講座の開講に協力することとなり、2009年から2013年にかけてマトグロッソ連邦大学の遠隔授業をサポート、スクーリング授業を実施するなどして200人以上の受講生に教育学の学士号とブラジル国の教員資格を付与しました。今回の講演会は、そうして巣立つていった卒業生たちの今後について考察する機会でもありました。

(小貫大輔)



研究会

・文明研究所研究会（2016年1月27日）

「関東大震災復興と観光政策－横浜復興博と箱根觀光博をめぐって」（コアプロジェクト3）

研究員 馬場弘臣 教育研究所教授

・文明研究所（コア・プロジェクト1）研究会（2016年2月1日）

「ドイツと日本を結ぶもの・日独修好150年の歴史展からみえてくるものーシーボルト父子を中心にー」

所長 梅澤宣賢 総合教育センター教授

「グローバル人材に必要な能力（＝グローバルスキル）の構成要素について」

研究員 松本佳穂子 外国語教育センター教授

「日本在住ブラジル人の挨拶の身体儀礼をめぐる文化的適応の戦略について」

所員 小貫大輔 教養学部国際学科教授

総括

所員 平野葉一 文学部ヨーロッパ文明学科教授
授・副学長

・文明研究所コア・プロジェクト全体研究会

(2016年2月22日)

コア・プロジェクト1 「アイデンティティの多様性と共生(第2期)」

コア・プロジェクト2 「グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築(第2期)」

コア・プロジェクト3 「震災復興と文明(第2期)」

コア・プロジェクト4 「文明遺産をめぐる課題」

コア・プロジェクト5 「超領域人文学(Trans-Disciplinary Humanities)構築に向けた基礎研究」

それぞれのプロジェクトから数件の発表とディスカッションをおこなった。

所員の活動

大江一平

文明研究所所員・総合教育センター 准教授



【執筆・翻訳】

- 吉田仁美・渡辺暁彦編『憲法判例クロニクル』（本人担当分：三菱樹脂事件、愛媛玉串料訴訟、上告制限事件、郵便法違憲判決、長沼ナイキ事件）ナカニシヤ出版 2016年4月公刊予定

【報告・講演】

- 「交通検問を延長しての警察犬を使った捜査は第4修正に抵触するか——Rodriguez v. United States. No.13-9972 Apr. 21,2015——」
第20回合衆国最高裁判例研究会（2015年12月19日）（学習院大学法学部）

「レーンキスト裁判官の司法哲学とレーンキスト・コート」2015年度関西アメリカ公法学会（2015年12月20日）（大阪大学中之島センター）

【その他の活動】

- 講演会「大学と地域連携-これからの大学のサバイバル戦略-」
主催：「地域に関する法的アプローチ」研究会 共催：東海大学総合教育センター・東海大学文明研究所
講師：小林直三（高知県立大学文化学部教授） 司会・コメンテーター：大江一平（東海大学総合教育センター准教授）

小貫大輔

文明研究所所員・教養学部国際学科 主任教授



【執筆・翻訳】

- 「義務教育の場拡大—外国籍の子にも門戸開いて」（朝日新聞「私の視点」2015年6月12日）
- 「『キスとハグの授業』から日本の文化を再認識する」（東海大学新聞「知の架け橋—国際化を考える③」
2015年6月1日）
- 「北東部ブラジルの漁村『エステーバン村』におけるコミュニティ・ツーリズム試案」東海大学教養学部紀要『
(46: 57-68)、2016年3月
- 「『多文化子ども』から『ユネスコスクール』へ—プロジェクトの新しい方向性」『東海大学教養学部紀要』(46: 263-266)、2016年3月

【報告・講演】

- 「小さな子どもへの性教育のお話し」（東海大学To-Collaboプログラム地域連携講座、2015年4月20日）
- "Acumulação de capital cultural, introdução sobre o momento sócio-político a respeito das Free Schools e escolas alternativas—文
化資本の蓄積とフリースクールおよびオルタナティブ・スクールの置かれた社会・政治的状況（ポルトガル語による講演）"
(Fórum de Educação—ブラジル日本教育フォーラム、滋賀県、2015年5月4日)
- "Seminário Orientación Universitária—大学進学セミナー（スペイン語による講演）"（東海大学、2015年6月14日）
- 「性教育はこうやつたら盛り上がる」（アジア・オセアニア性科学連合日本オフィス講演会『THEニッポンの性教育2015』、2015年12月13日）
- 「フリースクール支援法とブラジル学校—日本の教育を開拓する10の提案」（第14回日伯フォーラム・文明研究所講演会『日本におけるブジ
ル人の教育と未来』、2015年12月19日）
- 「多文化共生について考えよう」（田富南小学校教育講演会、山梨県、2016年1月22日）

【その他の活動】

- 「日系社会次世代育成研修（中南米諸国よりの大学生招へいプログラム/JICA）」計画・実施（東海大学、2015年7月）
- 「UNESCO/ESD交流セミナー（日本/ユネスコパートナーシップ事業/文部科学省）」計画・実施（東海大学、2015年9月）

沓澤 宣賢

文明研究所所長・付属図書館長・総合教育センター 教授



【執筆・翻訳】

- 「明治政府の外交とアレクサンダー・フォン・シーボルト」（『ドイツと日本を結ぶもの－日独修好150年の歴史－』）国立歴史民俗博物館編集・発行 7月7日
- 「The Takenouchi Mission and Western Culture: The introduction of the telegraph」『文明』20号 2016年3月

【報告・講演】

- 「シーボルトとおイネ」「岡山の蘭学群像1 シンポジウム」4月16日 山陽新聞社 さん太ホール
- 「シーボルト研究の回顧と展望」「シーボルト・ゼミナール 100回記念講演会」5月30日 OAGドイツ文化会館
1階ホール
- 「シーボルトと日本」「平成27年度市民のための図書館教養講座」11月7日 伊勢原市立図書館
- 「The Takenouchi Mission and Western Culture : The introduction of the telegraph」International Symposium 「Proceedings of the 1St Civilization Dialogue between Europe and Japan」11月13日 Tokai University European Center

【その他の活動】

- 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 企画展示「ドイツと日本を結ぶもの－日独修交150年の歴史－」展示プロジェクト委員
2013年6月30日—2014年3月31日、2014年4月1日—2015年7月6日
- 人間文化研究機構日本関連在外資料調査研究事業実績評価委員会委員 2015年7月1日—2016年3月31日
- 「洋学史学会 2015年度シンポジウム「洋学事始」司会」5月17日 電気通信大学

田中 彰吾

文明研究所所員・総合教育センター 教授



【執筆・翻訳】

- 田中彰吾「心身問題と他者問題－湯浅泰雄が考え残したこと」，黒木幹夫・鎌田東二・鮎澤聰（編）『身体の知－湯浅哲学の継承と展開』所収（pp. 134-154），ビング・ネット・プレス，2015年12月
- Tanaka, S. Intercorporeality as a theory of social cognition. *Theory & Psychology*, 25(4), pp. 455-472, 2015年8月
- Tanaka, S. Embodying the other mind. *Proceedings of the Kyoto Conference 2015 "Beyond the Extended Mind: Different Bodies, Dolls, Female Soul and Eastern Spirit"*, pp. 86-101, 2015年6月
- Tanaka, S. Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective. 『文明』，No. 20, pp.35-40, 2016年3月
- 田中彰吾「復興のランドスケープ——東日本大震災後の防潮堤建設を再考する」『文明』，No. 20, pp.81-90, 2016年3月
- (翻訳) D・ラングドリッジ「セクシュアリティとシティズンシップ」『文明』，No. 20, pp.51-56, 2016年3月

【報告・講演】

- 田中彰吾「他者感の概念について」自他表象研究会（東京大学），一般発表，2015年11月21日
- Shogo Tanaka, "Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective", Civilization Dialogue between Europe and Japan (Tokai University European Center, Denmark), シンポジウム発表，2015年11月14日
- 田中彰吾「他者感へのエンボディード・アプローチ」日本心理学会第79回大会，シンポジウム発表（名古屋国際会議場），2015年9月22日
- 田中彰吾「荒川直哉氏の「人工物の現象学」について」心の科学の基礎論研究会&エンボディード・アプローチ研究会・合同研究会（明治大学），指定討論，2015年7月11日
- 田中彰吾「他者の心を身体化する」京都カンファレンス 2015「拡張した心を超えて：異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髄」（京都大学）一般発表，2015年6月21日
- ショーン・ギャラガー×田中彰吾×河野哲也「総合討論：心の新世紀」京都カンファレンス 2015「拡張した心を超えて：異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髄」（京都大学）シンポジウム討論，2015年6月22日

【その他の活動】

- (市民講座) 東海大学エクステンションセンター・総合教育センター連携講座「身体と環境へのまなざし，第2回：脳と身体の不思議な関係」，ユニコムプラザさがみはら，2015年12月4日
- (企画・運営) 東海大学文明研究所・ヨーロッパ学術センター共催，国際シンポジウム「Civilization Dialogue between Europe and Japan」（運営委員：沓澤宣賢，平野葉一，田中彰吾，田中久博，鷹取勇希），東海大学ヨーロッパ学術センター（デンマーク），2015年11月13-14日
- (企画) 日本心理学会，第79回大会，公募シンポジウム「他者感へのエンボディード・アプローチ」（司会：浅井智久，話題提供：平井真洋，中嶋智史，高橋英之，高野裕治，平石界，指定討論：乾敏夫），名古屋国際会議場，2015年9月22日
- (企画・運営) 京都カンファレンス 2015「拡張した心を超えて：異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髄」（企画代表：鎌田東二，河野哲也，田中彰吾），京都大学，2015年6月21-22日

平野葉一

文明研究所所員・文学部ヨーロッパ文明学科 教授



【執筆・翻訳】

- 「学問史から見た数学の展開」平野葉一・中村朋子共著 東海大学文明学科『文明研究』第33号 2015年6月刊行
- 「ヨーロッパにおける日本漆器受容とJapanningの展開に関する一考察」平野葉一・元治千明共著 東海大学文学部『東海大学紀要文学部』104輯 2016年3月刊行
- 「近代欧米における文学研究の展開と今日的課題」平野葉一・渡辺青共著 東海大学文学部『東海大学紀要文学部』104輯 2016年3月刊行
- 「文明研究に関する超領域人文学からの一考察」渡辺青・平野葉一共著 東海大学文明研究所『文明』20号 pp.91-100 2016年3月刊行

【報告・講演】

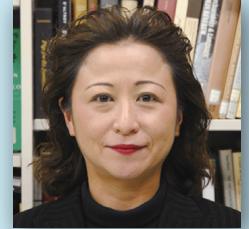
- 「A note on the possibility of a "Civilization Dialogue": from a Trans-Disciplinary Humanities perspective」平野葉一、文明研究所国際シンポジウム「日欧間の文明対話」2015年11月13日・14日

【その他の活動】

- 秦野市・秦野瓦斯「算数マジック教室～図形で遊ぼう」（秦野瓦斯）2015年8月20日
- 平塚子ども大学「奏アカデミー」（平塚市・東海大学共催）2015年11月21日

横山玲子

文明研究所所員・文学部アメリカ文明学科 教授



【執筆・翻訳】

- 「地位と役割—『ポポル・ヴフ』に描かれたキチエー・マヤの社会—」、『文明』第20号pp.69-80、2016年3月

【報告・講演】

- 「ウェウェテオトル（アステカ）の表象」、比較文明学会「災害と文明シンポジウム2 火山列島の災害と文化と文明」、京都大学稻盛財団記念館、2015年6月
- 「現代日本社会における「地位」と「役割」に関する一考察—キチエー・マヤの創世神話『ポポル・ヴフ』を手がかりに—」、国際学術セミナー「日本文化研究の拡充と連携」、漢陽大学校BK21Plus 日本研究特性化チーム（主催）、比較文明学会（共催）、長野県下高井郡山ノ内町湯田中、2016年2月
- 「神々が運ぶ時間—マヤの時間観念—」、比較文明学会関西支部・九州支部合同研究会「こよみ以前—文明比較の可能性をめぐって」、至誠館大学明教館及び萩市セミナーハウス講堂、2016年3月

【その他の活動】

- 座長：比較文明学会第33回大会「イノベーションと文明」、個人研究発表第4部会、東京理科大学葛飾キャンパス、2015年11月
- 企画、学術監修（山花京子と共同）：第316回東海大学文学部 知のコスモス・展示会「Creation Myths マヤとエジプトの創世神話」、2015年12月



東海大学文明研究所所報 2015
発行人 滝澤宣賢
発行日 2016年3月31日
発行所 東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目4-1-1 〒259-1292 tel:0463-58-1211 ext.4900~4902 fax:0463-50-2050